

ロウの4カテゴリー存在論 (1)

伊佐敷 隆弘

Lowe's Four-Category Ontology (1)

Takahiro ISASHIKI

要 旨

現代の分析形而上学を代表する哲学者の一人であるジョナサン・ロウの4カテゴリー存在論の概略を明らかにする。ロウにとってカテゴリー論は哲学の中心に位置する(第1節)。「個体/普遍」と「実体的/非実体的」という2つの区別を交差させることによって、対象(実体的個体)・モード(非実体的個体)・種(実体的普遍)・属性(非実体的普遍)の4つの根本的カテゴリーが生み出される。これら4カテゴリーの間には「個体は普遍を実例化し、非実体は実体を特徴づける」という存在論的關係が成り立っている。また、普遍は個体なしで存在することはできない(第2節)。ロウによると、根本的カテゴリーの種類が少ない節約的な他のカテゴリー論よりも、4カテゴリー存在論は説明力の点で優れている。すなわち、4カテゴリー存在論は「性質の知覚」「トロープの個別化」「自然法則の分析」「傾向性の分析」などの問題を他の理論よりも適切に解決する。個体だけが因果関係に入りうるので、知覚はモードを必要とする。モード(トロープ)は対象のあり方であって、その存在と同一性は対象に依存する。自然法則とは、「種が属性によって特徴づけられる」ということである。傾向性とは、「対象が、或る属性によって特徴づけられる種の実例である」ということであり、他方、生起状態とは、「対象が、或る属性の実例であるモードによって、特徴づけられる」ということである(第3節)。

はじめに

ジョナサン・ロウ(Jonathan Lowe)は現代の分析形而上学(analytic metaphysics)を代表する哲学者の一人である¹⁾。本論文では彼の形而上学の中心にある「4カテゴリー存在論(four-category ontology)」の概略を明らかにする。なお、彼の存在論に対する評価は本論文に続く「ロウの4カテゴリー存在論(2)」において行なうこととし、本論文ではロウの主張を理解することに専念したい。

1. 哲学の中心としてのカテゴリー論

ロウによると、哲学の中心には形而上学があり、形而上学の中心には存在論 (ontology) すなわち存在の学 (science of being) がある ([Lowe 2006, 1.1])²⁾。そして、存在論の中心にはカテゴリー論 (category theory) がある ([Lowe 2006, 1.2])。図示すると次の図1のようになる。このように、ロウにとってカテゴリー論は哲学の中心に位置するものである。

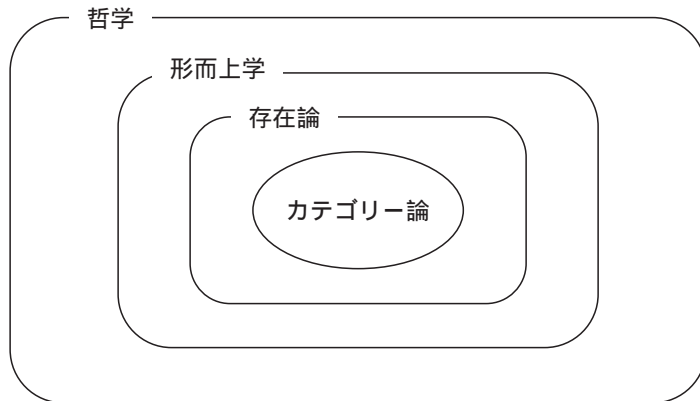


図 1

そして、この「カテゴリー」は、カントにおけるような「思考のカテゴリー (categories of thought)³⁾」ではなく、アリストテレスにおけるような「存在のカテゴリー (categories of being)⁴⁾」を意味する。つまり、我々は実在それ自体 (reality as it is in itself) について知ることができるのであって、存在論は、カントにおけるような「存在についての我々の思考に関する学 (science of our thought about being)」ではなく、アリストテレスにおけるような「存在に関する学 (science of being)」である ([Lowe 2006, 1.1, 1.2])⁵⁾。

カテゴリーとは、「存在者の種 (kind of entities)」であり、「そのメンバーが明確な存在条件と同一性条件 (distinctive existence and identity conditions) によって決定」され、「その種の本性 (nature) がアプリアリに決定可能 (determinable a priori) であるもの」である。したがって、「種」と言っても、「トラ」や「金」のような自然種 (natural kind) は、その本性が (科学的観察や実験によって) アポステリオリにのみ決定可能であるから、カテゴリーとは別のものである ([Lowe 2006, 2.1])。

ロウによれば、「それ以上還元 (reduce) できない」という意味で根本的 (fundamental) なカテゴリーは4つある。すなわち、「対象」・「モード」・「種」・「属性」の4つである⁶⁾。存在論的節約 (ontological economy) を追求する形而上学者は、カテゴリーの種類がもっと少ない存在論を好むが、4カテゴリー存在論は説明力 (explanatory power) の点でそれらの競合するカテゴリー論より優れている。すなわち、4カテゴリー存在論は、「因果」・「傾向性 (disposition)」・「自然法則」・「反事実条件法 (counterfactual conditional)」などを統一的に説明できる。ロウはこのように主張する ([Lowe 2006, preface])。

2. 対象・モード・種・属性

(1) 個体と普遍, 実体と非実体

「対象」・「モード」・「種」・「属性」の4つのカテゴリーは、「個体 (particular) / 普遍 (universal)」と「実体的 (substantial) / 非実体的 (non-substantial)」という2つの区別を交差させることによって生み出される。

まず、この2つの区別を交差させることによって、次の4つのカテゴリーが生み出される。すなわち、

- 実体的個体 (substantial particular)
- 非実体的個体 (non-substantial particular)
- 実体的普遍 (substantial universal)
- 非実体的普遍 (non-substantial universal)

の4つである。図示すると次の表1のようになる。

表 1

	実体的	非実体的
普遍	実体的普遍	非実体的普遍
個体	実体的個体	非実体的個体

そして、ロウはこれら4つのカテゴリーをそれぞれ次のように呼ぶ。

- 実体的個体 = 対象 (object)
- 非実体的個体 = モード (mode)
- 実体的普遍 = 種 (kind)
- 非実体的普遍 = 属性 (attribute)

図示すると次の表2のようになる。

表 2

	実体的	非実体的
普遍	種 (実体的普遍)	属性 (非実体的普遍)
個体	対象 (実体的個体)	モード (非実体的個体)

このようにして「対象」・「モード」・「種」・「属性」の4つのカテゴリーが得られる。表2に示されているように、個体には対象 () とモード () の2種類があり、普遍には種 () と属性 () の2種類がある。また、実体には対象 () と種 () の2種類があり、非実体にはモード () と属性 () の2種類がある。モード () は「個体としての性質 (または関係)」であり、属性 () は「普遍としての性質 (または関係)」である ([Lowe 2006, preface, 2.1])。

(2) 対象

対象 () は「個の実体 (individual substance)」ないし「個の対象 (particular object)」とも呼ばれる ([Lowe 2006, 2.1])。対象はさらに「具体的対象 (concrete object)」と「抽象的对象 (abstract object)」という下位カテゴリー (sub-category) に分類される。具体的対象が時空間内に存在するのに対し、抽象的对象は時空間内に存在しない (少なくとも空間内に存在しない), という存在条件 (existence condition) の違いがあるから両者は別のカテゴリーである ([Lowe 1998, ch. 10,], [Lowe 2006, 5.8])。具体的対象はさらに「生物体 (living organism)」や「物質塊 (mass)」などの下位カテゴリーに分類される。生物体と物質塊とはその同一性条件 (identity condition) が異なるから別のカテゴリーである。というのは、生物体は成長とともに構成要素が変化しても同一性を保つが、物質塊の場合、構成要素である粒子の消失や入れ替わりは物質塊の同一性を損なうからである。一方、抽象的对象はさらに集合 (set) や命題 (proposition) などの下位カテゴリーに分類される⁷⁾。このように、カテゴリーは、階層的な組織を持つとともに、明確な存在条件や同一性条件によって分類される ([Lowe 2006, 1.2, 2.1])。

ロウはカテゴリーの階層構造を次の図2のように図示している ([Lowe 2006, Figure 1.1])。ただし、この図はすべての下位カテゴリーを網羅しているわけではない。例えば、「普遍」の下位カテゴリーとして「性質」と「関係」が挙げられているが、むしろ4カテゴリーのうちの「属性」と「種」を挙げるべきであろう⁸⁾。(なお、ロウの言う「属性」は「性質」と「関係」の両方を意味する。また、図中の「トロープ」は、4カテゴリーの内の「モード」のことである。)

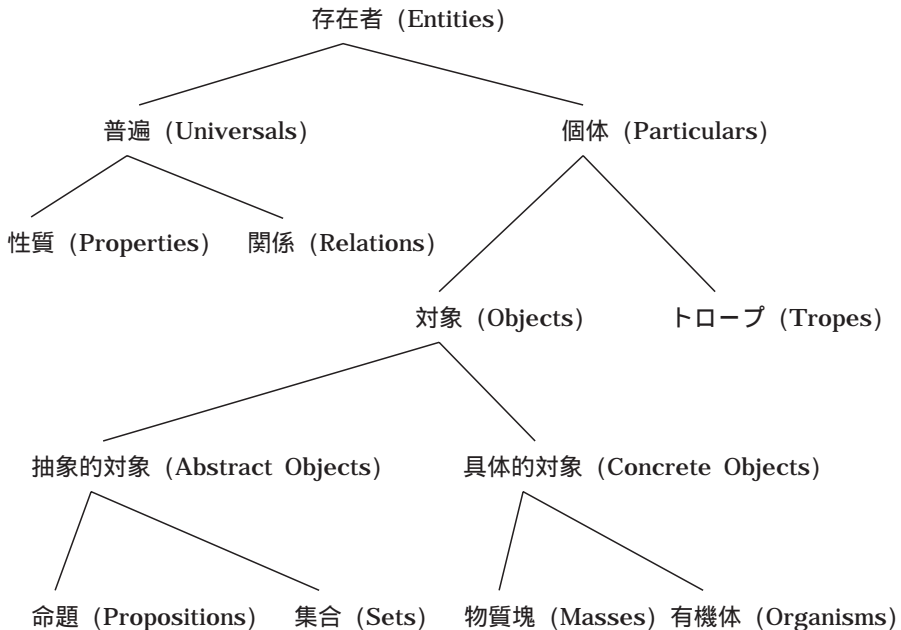


図2

(3) 種とモード

種 () は「惑星」「花」などの名詞的一般名辞 (substantival general term) すなわち「対象の種を表す語」に対応する。他方、属性 () は「赤い」「丸い」などの形容詞的一般名辞 (adjectival general term) すなわち「対象の性質を表す語」に対応する ([Lowe 2006, 1.6, 2.1])。

モード () は、対象の持つ性質や、他の対象との関係であるが、属性 () が「普遍としての性質・関係」であるのに対し、モードは「個体としての性質・関係」である。モードは論者によって「トロープ (trope)」、「個的偶有性 (individual accident)」、「個的性質 (particular quality)」、「抽象的個体 (abstract particular)」などと呼ばれている ([Lowe 2006, 2.1])。このうちでは「トロープ」という名称が最も有名であるが、ロウは「モード」と呼ぶ⁹⁾。

(4) カテゴリー間の存在論的關係

次に、これら4つのカテゴリーの間に成り立つ存在論的關係について見てみよう。ロウによると、(i) 実例化 (instantiation)、(ii) 特徴づけ (characterization)、(iii) 例化 (exemplification) という3つの関係がある。

まず、「実例化」は個体 () と普遍 () の間に成り立っている。それは、「個体は普遍を実例化 (instantiate) する」という関係、言い直せば、「個体は普遍の実例 (instance) である」という関係である。すなわち、対象 () は種 () の実例であり、モード () は属性 () の実例である ([Lowe 2006, 2.1])。

具体例によって説明しよう。今、机の上に3個のトマトがあるとする。これらはトマトという種に属する3つの別々の対象 () である。つまり、これら3個のトマト (対象) は「トマト」という種 () の実例である。そして、これら3個のトマトは同じ色合いの鮮やかな赤色をしているが、それらの色はそれら3個のトマトとそれぞれ同じ場所に存在している。つまり、それらの色は、別々の場所にある3つの別々の個体である。このような「個体としての性質」がモード () である。すなわち、それら3つのモードは、「鮮やかな赤色」という同じ属性 () (普遍としての性質) の実例である。トマトという種を実例化する対象 (個々のトマト) が机の上に3個あるように、「鮮やかな赤色」という属性を実例化する3つのモードが別々の場所に (3個のトマトとそれぞれ同じ場所に) 存在している。これが「実例化」という関係である。

次に、「特徴づけ」は非実体的カテゴリー () と実体的カテゴリー () の間に成り立っている関係である。すなわち、「非実体的カテゴリーは実体的カテゴリーを特徴づける (characterize)」という関係である。モード () は対象 () を特徴づけ、属性 () は種 () を特徴づける。トマトの例で言えば、個々の「鮮やかな赤色」(モード) は個々のトマト (対象) を特徴づけ。同様に、「鮮やかな赤色」(属性) はトマトという種 () を特徴づける。これが「特徴づけ」という関係である。

以上の「実例化」と「特徴づけ」を図示すると、次の図3のようになる。ロウはこの図を「存在論的四角形 (ontological square)」と呼んでいる ([Lowe 2006, 2.1, Figure 2.1])。

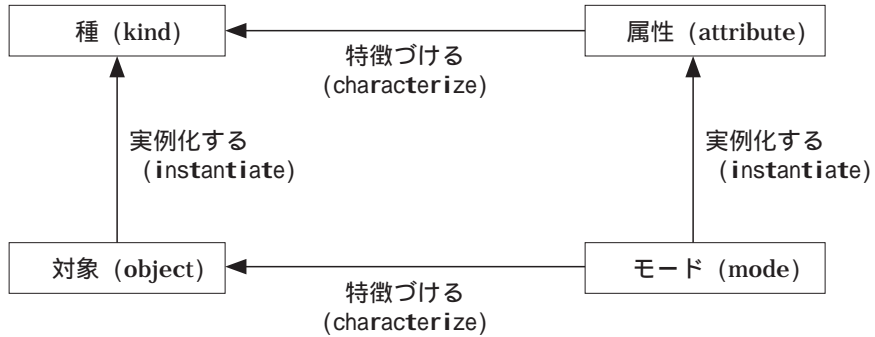


図3 (存在論的四角形)

この「実例化」という存在論的関係を用いて普遍と個体を区別することができる。すなわち、普遍とは「実例を持つ存在者、少なくとも、実例を持ちうる存在者」であり、個体とは「実例を持ちえない存在者」である ([Lowe 2006, 5.5])。

(iii) の「例化 (exemplification)」は、「実例化 (instantiation)」や「特徴づけ」のような根本的な関係ではなく、実例化と特徴づけの組み合わせによって成り立つ関係である。これについては、次の第3節(4)「傾向性の分析」で述べる。

(5) 普遍に関する内在主義

「トマト」という種 () は、個々の対象 () としてのトマトの存在ぬきでそれだけで自立して存在することはできない。種の存在は対象の存在に依存している。同様に、普遍としての性質すなわち属性 () は、個体としての性質すなわちモード () の存在ぬきで存在することはできない。このように、普遍 () の存在は個体 () の存在に依存している。つまり、実例を持たない普遍は存在しえない。このように、普遍の存在は個体に内在的 (immanent) であって、超越的 (transcendent) ではない¹⁰⁾。言い直せば、個体は普遍に対して存在論的優位性 (ontological priority) を持つ ([Lowe 2006, 2.2, 3.1])。また、普遍は空間的位置を持たない。位置規定を持つことなく存在しうる ([Lowe 2006, 2.2])。

3. ロウの4カテゴリー存在論の説明力

ロウは、4カテゴリー存在論は説明力の点で他の競合するカテゴリー論より優れていると主張する。その際、「性質の知覚」、「トロープの個別化」、「自然法則の分析」、「傾向性の分析」の4つの問題を取り上げている。

(1) 性質の知覚

ロウによれば、個体だけが因果関係 (causal relation) の中に入りうる。そして、知覚 (perception) は知覚者 (perceiver) と知覚されるもの (what is perceived) との間の因果関係を必然的に伴うから、知覚が可能であるためには、個体が必要である。例えば、眼前のト

マトの赤さを知覚しているとき、知覚されているのは個体としての赤さすなわち赤さのモードである。また、葉が炎によって燃やされて緑色から茶色へと変化する場合、普遍 (属性) としての緑色や茶色は生成も消滅もしない。生成消滅したのは個体 (モード) としての緑色や茶色である。このように、モードは知覚とりわけ変化の知覚の対象である ([Lowe 2006, 2.2])¹¹⁾。

(2) トロープの個別化

モードは対象のあり方 (ways of being)¹²⁾、或いは、対象の特徴 (feature) ないし様相 (aspect) であって、対象の構成要素 (constituent) ではない ([Lowe 2006, 6.7])。だから、「モード同士が何によって結び付けられているのか」という問題は生じない。「対象とは、同一時空に共存するトロープの束である」と主張する説¹³⁾のように、トロープ (すなわちモード) を対象の構成要素だと考えると、「トロープが1つの対象から離れて漂い出して他の対象に移る」可能性を認めるか、さもなくば、「一切の性質を持たない裸の個体 (bare particular) が基体 (substratum) としてトロープを支えている」と考えざるを得なくなってしまう。4 カテゴリー存在論にはそのような心配はない ([Lowe 2006, 1.6, 2.3])。モード () の存在と同一性は、それが特徴づける対象 () の存在と同一性に依存しているのである ([Lowe 2006, 3.3, 7.8])¹⁴⁾。

(3) 自然法則の分析

ロウ ([Lowe 2006, 2.4]) によれば、自然法則とは、「種が普遍としての性質によって特徴づけられる (characterized)」ということ、或いは、「複数の種が普遍としての関係によって特徴づけられる」ということである。要するに、種 () が属性 () によって特徴づけられるということである。それゆえ、自然法則の基本形式は次のようになる。ただし、KやJは種、Fは性質、Rは関係を表す。

種KはFである (Ks are F)。

種Kは種Jに対してRである (Ks are R-related to Js)。

例えば、「惑星は楕円軌道を描く」という自然法則は、「『惑星』という種 () が『楕円軌道を描く』という性質 () によって特徴づけられる」というように分析される ([Lowe 2006, 1.6, 9.2])。

ロウによれば、普遍の存在を認めない立場 (本節 (5) で後述するトロープ1元論や対象・トロープ2元論) の場合、自然法則は、個々の惑星 (対象) の間の斉一性 (ないし恒常的连接) にならざるをえない。しかし、そうなると、「単なる一般化が反事実条件文を含意しないのに対して、自然法則が反事実条件文を含意する」という違いが説明できなくなる。例えば、「どんな金塊も直径1マイル以下である」という単なる一般化からは「世界にもっと金塊があったとしたら、それは直径1マイル以下であったらう」という反事実条件文は帰結しない。これに対し、「どんなウラン塊も直径1マイル以下である」(一定の大きさを超えると爆発するから) という自然法則からは「世界にもっとウラン塊があったとしたら、それは直径1マイル以下であったらう」という反事実条件文が帰結する。個体間の斉一性からは両者の違いが出てこない ([Lowe 2006, 1.5, 9.2])。

また、アームストロング ([Armstrong 1983]) は、普遍の存在を認めるが、複数の普遍の間に「必然化する (necessitate)」という第 2 階の関係を想定して、自然法則の基本形式を、「性質 F は性質 G を必然化する (F-ness necessitates G-ness)」と分析する。例えば、「惑星は楕円軌道を描く」という自然法則は「『惑星という性質』が『楕円軌道を描くという性質』を必然化する」というように分析される。しかし、法則は対象の傾向 (tendency) を決定するが現実 (actual) の振る舞いを決定しないから、この分析は適切ではない ([Lowe 2006, 2.4, 2.5, 9.2])。

(4) 傾向性の分析

傾向性 (disposition) とは、例えば、眼前の皿の中の食塩という対象が持つ水溶性 (water-soluble) という性質のことである。これに対し、その対象が実際に水に溶けている (dissolving) 状態は「生起状態 (occurrent state)」と呼ばれる。傾向性はしばしば反事実条件文によって分析される。例えば、「この対象は水溶性だ」は「もしこの対象が水中に浸されていたら、それは溶けていたであろう」と分析される。しかし、水中に浸されても溶けない場合もある。例えば、その水の中に既に大量の食塩が溶けていて飽和していた場合である。したがって、この反事実条件文が成り立つためには「妨害要因 (溶けることを妨げる要因) が一切無い」という包括的な条件が必要である。しかし、「もしこの対象が水中に浸され、かつ、何ものも妨害しなかったとしたら、それは溶けていたであろう」と分析することは、分析としては内容空疎である。かといって、すべての妨害要因を列挙することはできない。それゆえ、我々が「この対象は水溶性だ」と述べるときに意味していることは、「もしこの対象が水中に浸されていたら、それは溶けていたであろう」という反事実条件文が真だということではありえない ([Lowe 2006, 1.6, 8.7])¹⁵⁾。

これに対し、4 カテゴリー存在論は傾向性と生起状態の区別を、対象が属性を例化する (exemplify) 仕方の違いとして説明する ([Lowe 2006, 1.6, 2.5, 8.5])。

前節 (4) で述べたように、個体と普遍の間には実例化 (instantiation) という存在論的關係が、実体と非実体の間には「特徴づけ (characterization)」という存在論的關係が成り立っている。これらの関係の組み合わせによって対象 () と属性 () の間に成り立つのが「例化 (exemplification)」という存在論的關係である。次の図 4 のとおりである。

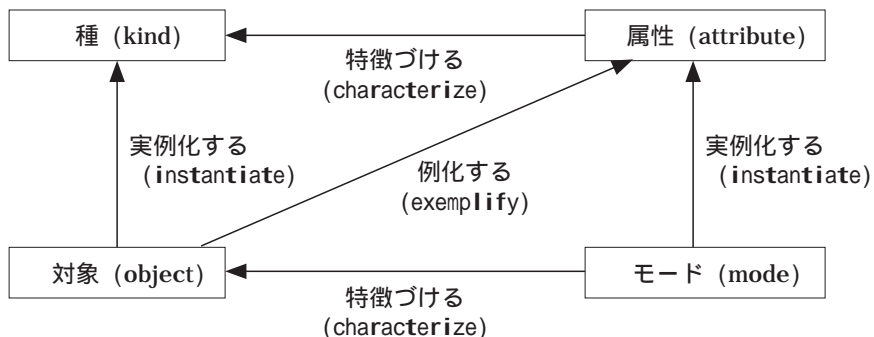


図 4

図より明らかなように、対象 () が属性 () を例化する仕方は、種 () を経由する仕方とモード () を経由する仕方の2通りがありうる。すなわち、次の (a) (b) の2つである。

- (a) 当該対象 () は或る種 () の実例であり、その種は或る属性 () によって特徴づけられる。(「 - 実例化 - - 特徴づけ - 」という仕方の例化)
- (b) 当該対象 () は或るモード () によって特徴づけられ、そのモードは或る属性 () の実例である。(「 - 特徴づけ - - 実例化 - 」という仕方の例化)

そして、(a) において、対象は属性を傾向的 (dispositionally) に例化しており、(b) において、対象は属性を生起的 (occurrently) に例化している。

例えば、眼前にある食塩という対象について、それが「水溶性」という傾向性を持っているとは、「眼前の食塩」というその対象 () が「食塩」という種 () の実例であり、かつ、その種が「水に溶ける」という属性 () によって特徴づけられている (言い換えれば、「種『食塩』は水に溶ける」という自然法則が成り立っている) ということである。他方、眼前の食塩を水に入れて溶けた場合、「水に溶けている」というその状態 (生起状態) は、「眼前の食塩」というその対象 () が「水に溶けている」というモード () によって特徴づけられており、かつ、このモードが「水に溶ける」という属性 () の実例である、ということである。

食塩が水に溶けている状態 (生起状態) は知覚できるが、食塩の水溶性という傾向性は知覚できない。このことは (「個体は知覚できるが、普遍は知覚できない」ということを前提して) 4 カテゴリー存在論によって次のように説明される。すなわち、モードは個体であるから、モード経由の例化である生起状態は知覚できる。他方、種は普遍であるから、種経由の例化である傾向性は知覚できない。

前述の「惑星は楕円軌道を描く」という自然法則においても、「楕円軌道を描く」というのは傾向性を表している。すなわち、この法則は「『惑星』という種に属する個体は『楕円軌道を描く』という属性によって特徴づけられる」ということを主張している。それゆえ、現実の軌道が何らかの妨害要因の影響によって楕円軌道からずれたとしても、この法則は偽とされないのである。このように、法則が決定するのは対象の傾向であって、現実の振る舞いは (他の対象の振る舞いなど) 多くの要因によって決定される。

(5) 競合理論に対する優位性

ロウは競合する他のカテゴリー論に対して自らの4 カテゴリー存在論が優れていると主張する ([Lowe 2006, 1.3, 2.6])。彼が比較しているのは次の表3にある4つのカテゴリー論である ([Lowe 2006, 1.3])。表の中の「」は「根本的なカテゴリー」を意味し、「x」は「他のカテゴリーに還元不可能ないし除去可能」ということを意味する。

表 3

	対象	普遍	トロープ
トロープ 1 元論	×	×	
対象・普遍 2 元論			×
対象・トロープ 2 元論		×	
4 カテゴリー存在論			

「トロープ 1 元論」とは、根本的カテゴリーとしてトロープだけを認める立場である。例えば、キャンベル ([Campbell 1981], [Campbell 1990]) の「対象 = トロープの束」「普遍 = 類似するトロープのクラス」説である。次の「対象・普遍 2 元論」とは、根本的カテゴリーとして対象と普遍だけを認め、トロープを認めない立場である。例えば、アームストロング ([Armstrong 1997]) の普遍実在論である。ただし、アームストロングは「種 = 属性の複合体」と考えており、ロウのように、種と属性という 2 種類の普遍を認めない¹⁶⁾。3 つめの「対象・トロープ 2 元論」とは、根本的カテゴリーとして対象とトロープだけを認め、普遍を認めない立場である。例えば、マルティン ([Martin 1980]) の基体説である。そして、最後の「4 カテゴリー存在論」は、ロウ自身の立場であり、根本的カテゴリーとして対象と普遍とトロープ (モード) の 3 つをすべて認めるとともに、さらに普遍の中で種と属性を区別する立場である。

ロウ ([Lowe 2006, 2.6]) は、「トロープの個別化」、「自然法則の分析」、「性質の知覚」、「傾向性の分析」という 4 つの問題に関して、これら競合するカテゴリー論を比較し、自らの 4 カテゴリー存在論の優位性を主張する。その結果をロウが表にしたものが次の表 4 である。表の中の「」は「可能」を、「×」は「不可能」を意味する。ロウ自身の見解は、「トロープの個別化」については本節 (2) で、「自然法則の分析」については本節 (3) と (4) で、「性質の知覚」については本節 (1) で、「傾向性の分析」については本節 (4) で述べた。

表 4

	トロープの個別化	自然法則の分析	性質の知覚	傾向性の分析
トロープ 1 元論	×	×		×
対象・普遍 2 元論			×	×
対象・トロープ 2 元論		×		×
4 カテゴリー存在論				

表 3 と表 4 の比較からも分かるように、ロウの主たる主張は次のとおりである。

- ・ トロープの個別化には対象 () が根本的カテゴリーとして必要である。
- ・ 自然法則の分析には普遍 () が根本的カテゴリーとして必要である。
- ・ 性質の知覚にはトロープ () が根本的カテゴリーとして必要である。
- ・ 傾向性の分析には 4 つのカテゴリーすべて () が根本的カテゴリーとして必要である。

ロウによれば、これら4つの問題すべてに答えられるのは、4 カテゴリー存在論だけであるから、4 カテゴリー存在論は、根本的カテゴリーの種類が少ない節約的な他のカテゴリー論よりも説明力の点で優れているのである。

おわりに

本論文ではロウの「4 カテゴリー存在論」の概略を明らかにした。彼の存在論に対する評価は本論文に続く「ロウの4 カテゴリー存在論 (2)」において行なう。

注

- 1) ロウは1950年生まれ。イギリスのダラム大学 (the University of Durham) の教授である。加地大介 ([加地 2008, ch. 1]) による紹介がある。
- 2) [Lowe 2006] への言及は節番号による。例えば「1.1」は第1章第1節を意味する。また、「1.1, 1.2」は第1章第1節と第1章第2節を意味する。
- 3) カントの『純粋理性批判』に登場する「純粋悟性概念」のことである。すなわち、分量 (単一性・数多性・総体性)、性質 (実在性・否定性・制限性)、関係 (実体的性・因果性・相互性)、様相 (可能性・存在性・必然性) の4種12個のカテゴリーである。
- 4) ロウ ([Lowe 2009, pp.8-10]) はアリストテレスの『カテゴリー論』第2章での4つのカテゴリーとロウの4カテゴリー存在論の平行関係を主張する。すなわち、対象 (実体的個体) = (基体について) 述定されず、(基体に) 内属しない。モード (非実体的個体) = 述定されず、内属する。種 (実体的普遍) = 述定され、内属しない。属性 (非実体的普遍) = 述定され、内属する。そして、アリストテレスの「第1実体」が対象に、「第2実体」が種に相当する。ただし、ロウは「述定」「内属」によってではなく、「実例化」「特徴づけ」という形而上学的関係によって4カテゴリーの関係を示す。すなわち、対象 = (種を) 実例化し (モードによって) 特徴づけられる。モード = (属性を) 実例化し (対象を) 特徴づける。種 = (対象によって) 実例化され (属性によって) 特徴づけられる。属性 = (モードによって) 実例化され (種を) 特徴づける。(ロウの4つのカテゴリーや「実例化」「特徴づけ」については本論文第2節で後述する。)
- 5) 同様に、ロウ ([Lowe 1998, p. 6, n. 4]) は、ストローソン ([Strawson 1959, introduction]) の記述的形而上学 (descriptive metaphysics) が「人間の持つ概念構造 (conceptual structure) の最も一般的な特色を明らかにする」ことに留まっているのを批判し、「世界の構造」そのものの特色を明らかにしうることを主張する。
- 6) この4つ以外のカテゴリーはこの4つのどれかに還元される。例えば、出来事 (event) や過程 (process) はモードに還元される ([Lowe 2006, 5.7])。
- 7) ただし、数 (number) は抽象の対象ではなく、種すなわち普遍であるとロウ ([Lowe 2006, 5.8]) は主張する。
- 8) ただし、ロウ ([Lowe 2006, 2.1]) によれば、「普遍」と「個体」という語は、厳密に言えば、カテゴリーを表してはならず、カテゴリー横断的 (transcategorical) な語である。「対象」・「モード」・「種」・「属性」が最も根本的なカテゴリーだからである。したがって、「普遍の下位カテゴリー」という言い方も厳密には誤りである。
- 9) この「モード」という語はジョン・ロックに由来する ([Lowe 2006, 6.3])。
- 10) ロウによると、これは普遍に関するアリストテレスの主張と同じである。
- 11) このように、因果項になりうるのは個体だけであるから、実例 (としての個体) を持たない普遍は知覚や因果においていかなる役割も果たしえない ([Lowe 2006, 6.7])。
- 12) 属性も対象のあり方である。すなわち、属性は「物の普遍的あり方 (universal 'ways things are')」であり、モードは「物の個的なあり方 (particular 'ways things are')」である ([Lowe 2006, 6.3])。
- 13) これは、キャンベル ([Campbell 1981], [Campbell 1990]) のトローブ1元論の主張である。
- 14) モードは対象に同一性依存 (identity dependence) するとともに、固定的に存在依存 (rigid existential dependence) する。しかし、逆に、種は (本質的) 属性に同一性依存するとともに、固定的に存在依存する ([Lowe 2006, 7.8])。「固定的に存在依存」とは、「一方が存在するときにかつそのときのみ他方が存在する」ということであり、「非固定的に存在依存 (non-rigid

existential dependence)」するとは、「一定のタイプに属する一方が存在するときにかつそのときにのみ他方が存在する」ということである。例えば、普遍に関する内在主義において、種は対象に非固定的に存在依存する。特定の対象でなく、その種に属する何らかの対象が存在すれば、当該種は存在できるからである。「同一性依存」とは、「一方の同一性が他方の同一性に依存する」ということである。例えば、本文で述べたように、モードの同一性は（それが特徴づける）対象の同一性に依存する。「固定的な存在依存」、「非固定的な存在依存」、「同一性依存」については [Lowe 2006, 3.1] を参照せよ。

- 15) ただし、逆に、この反事実条件文が真になる理由（の少なくとも一部）は当該対象が水に溶ける力を持っているということである。
- 16) これに対し、ロウ ([Lowe 2006, 2.3]) は、いかなる種も非典型的実例を持ちうるから、「種 = 属性の複合体」ではない、と批判する。

文献表

- Armstrong, D. M. (1983) *What is a Law of Nature?* Cambridge University Press.
- Armstrong, D. M. (1997) *A World of States of Affairs*, Cambridge University Press.
- Campbell, Keith (1981) "The Metaphysic of Abstract Particulars," *Midwest Studies in Philosophy*, vol. 6, pp. 477-488.
- Campbell, Keith (1990) *Abstract Particulars*, Basil Blackwell.
- 加地大介 (2008) 『穴と境界：存在論的探究』春秋社。
- Lowe, E. J. (1998) *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford University Press.
- Lowe, E. J. (2006) *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*, Oxford University Press.
- Lowe, E. J. (2009) *More Kinds of Being: A Further Study of Individuation, Identity, and the Logic of Sortal Terms*, Wiley-Blackwell.
- Martin, C. B. (1980) "Substance Substantiated," *Australasian Journal of Philosophy*, vol. 58, pp. 3-10.
- Simons, Peter (1994) "Particulars in Particular Clothing: Three Trope Theories of Substance," *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. 54, pp. 553-575. (邦訳：ピーター・サイモンズ「個別の衣をまとった個別者たち 実体に関する三つのトロープ説」柏端達也・青山拓央・谷川卓編訳『現代形而上学論文集』勁草書房，2006年。)
- Strawson, Peter Frederick (1959) *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*, Methuen & Co. Ltd. (邦訳：ピーター・フレデリク・ストローソン『個体と主語』中村秀吉訳，みすず書房，1979年。)

(2012年5月8日受理)